普段着のわたしたち

9月 13 日、庭の彼岸花が咲き始めました。

例年、ほぼお彼岸に合わせて咲きますが今年は1週間早いです。秋の訪れが早いのでしょうか。お彼岸まで持たないのではと心配です。

萩も咲き始めました。暑い夏が去り、境内の景色が変わりつつあります。

訶梨帝母

冷やし中華が好きです。ある本に曰く「普通の冷やし中華が一番美味しい」と。確かにそうかもしれません。豪華だから美味しいというものでもないのかもしれません。

なので具材はシンプルに。きゅうり、玉子、ハムにゴマとメンマ。きゅうりは細かく切り辛子とマヨネーズ和えに。

麺は細打ちの乾麺、これがなかなか良いのです。素麺ほどの細さで、茹で時間を短めに。「つゆ」は中国産の香醋をベースに。自分なりの最高の「かたち」を求めるのは楽しいですね。

征阿

ＪＲ岐阜駅と名鉄岐阜駅を結ぶ少しだけ長い歩道を歩くことが私は大好きです。高架橋になっていて、木々の様子を上から眺めるように歩きます。新緑の季節には「ナンジャモンジャの木」が繊細な綿のような花を咲かせ、夏からはドングリの成長する様子を眺めます。歩道の下はイベントが出来る広場で、黄金の信長公の像が見守っています。

俊徳丸

本堂が子どもたちとお母さんの賑やかな声でいっぱいになりました。ヨガインストラクターの安藤さんが「親子ヨガと腕輪数珠作り」を企画され、２人で必要な物を事前に整えました。

女の子は綺麗なものを作る作業は大好きですし、男の子にとっても集中力を養うのに効果が高く真剣にやっています。

準備さえ整えておけば、腕輪数珠は 10 分～ 15 分で完成です。

また一緒にやりましょう。どうぞお楽しみに。

迷走坊

『友引町内会通信』はパソコンやタブレットでもお読みいただけます。検索は http://www.daigoji-temple.jp/「友引町内会通信」をクリックしてください。寺務局

波長が合う

私の長男が中学生の３年間、毎朝本堂の隅にお祀りしてある韋駄天さまにお水をお供えし、その前で御経の練習をしてから登校していました。陸上部に所属し長距離走をしていたので、韋駄天さまの「足の速さ」にあやかりたいという気持ちがあったのかも知れませんが、それだけではないように思います。宗派等にとらわれず、何か自分と「波長」が合う「神佛」に出会うことができれば、それは大変幸せなことです。では「波長」とは？　上手に説明できませんが、昔、谷啓さんが「ガチョ～ン」とギャグした時に心に響き届いたものですかね。…いや違う、これまた失礼しました。と、ずっこけたものです。

幸い、私のお寺も「迷走坊さん」のお寺も歴史が古く、阿弥陀さまの他にお地蔵さま、観音さま、大日さま、お薬師さま、お稲荷さま、役行者さまに至るまで深い「ガチョ～ン」をしてくださいます様々なお方をお祀りしています。もしお参りに来ていただければ、その「出会い」のチャンスは多いと思いますし、そんな寺であるよう目標にしています。最近の迷走坊さんの仕事ぶりからもそう思いました。

それら神佛方の場合と同じように、「波長」が合う「御経」と出会うことができれば、これまた「幸せ感」がふくらみます。私の場合、『観音経』と『延命十句観音経』と言えるでしょう。うちの宗派ではあまり馴染みのない御経ですが木魚を叩いていますと「幸せ感」が「びゅんびゅん！」飛んで来ますので、ついついよんでしまいます。『延命十句観音経』は、たった 42 文字の御経です。江戸時代に白隠禅師が世に広められました。観音さまにラブレターを書いているような御経なので、いつも 400 字の原稿用紙を持ち歩き、暇があればボールペンで写経しています。いつもの蕎麦屋さんで蕎麦を待っている間に４回かけます。原稿用紙にぴっちり８回収まるのも気持ち良いですし、夢中で書いていると、私に足らなかった「祈る力」がついてくる気がします。

今までＮＨＫの大河ドラマは見ていませんでしたが、今年１月に偶然見た折に、次郎法師（後の直虎）の小坊主役の新井美羽ちゃんが余りにもかわいらしくハマッてしまいました。それから間もなくして大人になった次郎法師（柴咲コウさん）が『観音経』の一部を歌のように美しくとなえているシーンと巡り合いました。（※ネットで『次郎法師　観音経』検索で見られます）どこかの宗派の「節」だと思い調べるとＮＨＫがつくったものだとわかりました。その時の柴咲コウさんのフレーズが頭に残っていましたので、翌日ぶっつけ本番で檀家さんの月参りでよんでみました。とても幸せな気持ちで最後までこのフレーズでよむことができました。これも「波長」が合った御経だからだと思います。その読経中、何故だか何年か前に訪れた越中八尾「風の盆」の情景が目に浮かんできました。

年回法要で、「ナームシシンキミョウライ…」あれ、段々下手になるなぁ（汗）　俊徳丸

清涼な夜になりました。窓を開けていると虫の音が響きますが、肌寒いので閉めなければいけないほどです。さあ、読書の秋です。私の個人的ベスト10に入る小説を一冊御紹介します。

浅田次郎著『椿山課長の七日間』。十二年前の作品で、映画化もされましたのでご存知の方も多いかと。

デパート婦人服売場担当の椿山課長四十六歳。日頃の不摂生と激務により脳溢血でポックリ。ご推察の通り「七日間」とは初七日までの七日間を、浅田次郎特有のコミカルな表現で描いています。

白いビル、そこは「中陰役所」。スピリッツ・アライバル・センター、通称「SAC」。運転免許講習所のような場所。スピーカーから「お集まりの皆様、ご心配は要りません。事前知識は何の役にも立ちません。指定の順路を整斉とお進みください」との案内。そして五戒の罪を犯した者はそれぞれ講習室に振り分けられ、教官の指導のもと講習を受けて「反省ボタン」を押すと、めでたく極楽往生へ続くエスカレーターに乗れるというもの。まこと浄土の教え。

椿山課長が道中に出会った穏やかな老女は講習免除。ゴールド免許扱い。係員からの労いの言葉と拍手で送られてエスカレーターに。椿山課長は自他共に認める謹厳実直な人物。容姿は禿頭肥満(映画では西田敏行が演じました)。愛妻と小学二年生の息子が一人。ところが促された講習室は「邪婬の部屋」。全く身に覚えがない彼は冤罪だ！と異議申し立てをし「反省ボタン」を拒んだ為に再審査。そして「死んでも死にきれぬ相応の事情」を認められ現世特別逆送措置に。その期間が七日間。条件は制限時間の厳守、復讐の禁止、正体の秘匿。そして現世とは対照的な仮の肉体(スレンダーな若い女性)を与えられいざ現世へ。

こもりうた㉝

同時期に逆送室から現世に戻った任侠の親分と椿山の息子と同じ年の少年。三人の「死んでも死にきれぬ相応の事情」や、彼らをサポートするSACのリライフ・サービスセンターのマヤ（もしや摩耶夫人から？）のお役人風な人物造形もいちいち面白い。

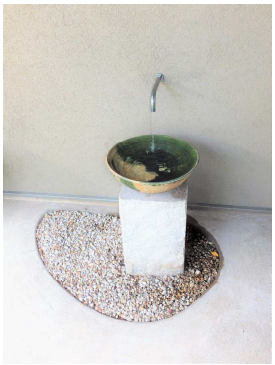
SACでは戒名でやりとりがなされます。死者が初めて自分の戒名を聞かされた時、戒名のランクによってこの先の扱いが変わるのかと不安に思う問いに対し、係員は、「そのようなことは決してございません。（中略）戒名のお値段というのは、ご遺族の方々が皆様の死をどのように納得なさるか、というだけのことですから。つまり、あちらの話です。（中略）でも無意味なことではありません。お布施というものはすべて死者へのオマージュですから、ご遺族にとっては必ず心の糧となります」と。妙に得心。

あとはお読みいただくしかないのですが。決して喜劇ではありません。何度も目頭が熱くなります。

訶梨帝母

積善の家に必ず余慶あり

夢をかなえて、自宅の庭に陶芸の工房を構えた方をお訪ねしました。織部焼の大鉢にしたたり落ちる水に心洗われ、その上に「積善之家」の文字を見て、一瞬、「私は入れないのではないか・・・？」と。



「積善の家に必ず余慶あり」（『易経』坤、文言伝）とは、善行を積み重ねた家にはその功徳として必ず福が訪れて吉事が起こり、その幸福は子孫にまで及ぶということです。

易経は続けて「積不善の家に必ず余殃あり」、先祖の犯した悪事の報いは必ず子孫へ災難として及ぶ、と。

個人的には、前半部分は採用し、後半以降は却下です。だって、「お前が災難に遭うのは、ひい爺ちゃんの悪事のせいだ」と言われても、そこまで責任を負えません。

無理に説明しようとして、「前世の宿業」などを持ち出せば、話が余計にこんがらがるだけです。うまくいった時はみんなのお陰。不味い結果は自分の責任。そう思っておく方が気が楽です。

佛教は「縁起説」、自業自得が基本です。善いことをすれば善い結果が訪れ、悪いことをすれば悪い結果を招く。

「保育園落ちた、日本死ね」のブログを取りあげて政府を追及した手腕を評価され、他人の不倫を糾弾しながら自分も同じことを週刊誌に報道されて評判を落とす。個人に帰するのが古代インドの考え方です。

これが中国人の考え方では、個人よりも一家とか一族が前へ出てきます。その人の善行悪行は子孫にまで及ぶという考え方で、日本人に大きく影響を与えました。

「通い婚」の時代には希薄であった「家」も、武士が台頭し、誰が家督を継ぐかが重要になって、一家とか一族が重視されるようになったのです。

私の最初の師匠から聞いた話ですが、お寺へ五～六人の子どもが遊びに来ていました。お昼時になり、みんなでご飯を食べようと席に着くと、一人の女の子が手を合わせて大きな声で言ったのです、

「箸取らば、親と先祖の恩を知れ、わが一力で食べると思うな」

「ちょっと待て！　食べるのやめ。みな箸を置け・・・。あんた、今言うたこと、誰に教わったの」

「ウチのお祖父ちゃんがご飯を食べる時にいつも言うてるから、聞いて覚えたの」

師匠は有名な布教師でしたから、この逸話は瞬く間に大勢の人に知れ渡りました。ですから私は、積善の「人」よりも、積善の「家」に軍配を上げたいのです。

工房内の一面は数多くの作品が展示してありました。誰かにお祝い事ができた時にプレゼントされるのだそうです。

積善の家を広めませんか。

迷走坊

『私説法然伝』（３３）

極楽への道⑧

先月号では「恵心僧都源信」という方がどのような方かについて書きました。今月はその続きになります。

【恵心僧都源信、寛和元年（九八五年）に『往生要集』三巻を撰述された。この書物がどうして日本人の精神性に影響をあたえるほどの書物であったのか？まずは『往生要集』がどのような書物であったのかをまとめる必要がある。『往生要集』は十門つまり十の構成となっており、約百六十以上の経典などを選び出し、引用し、文章を構成している。その構成は厭離穢土・欣求浄土・極楽証拠・正修念佛・助念方法・別時念佛・念佛利益・念佛証拠・往生諸業・問答料簡の十の章段となる。その内容を簡潔に言えば「この迷いの世界を離れて阿弥陀佛の世界＝西方極楽浄土に生まれるには正しい念佛が必要である」ということになる。今日において『往生要集』と言えば「地獄」の描写が最も有名である。これは厭離穢土の章段に仔細に記されている。苛烈極まる地獄の姿と対照的に西方極楽浄土の素晴らしさが強調され、そして念佛によって西方極楽浄土へと往生する、その念佛とはどのようなものかと源信は『往生要集』に全てを集約したのである。この書物が当時の人々に与えた影響は大きく、特に「地獄」のイメージを日本人に植え付けたのは『往生要集』によるところが大きい。また、日本のみならず当時の宋の国へと送られ絶賛されている。

そして『往生要集』を基として「念佛結社」が作られるようになった。「念佛結社」とは東晋の僧侶慧遠によって結成された「白蓮社」がそのルーツと言えるもので、同士が集まって念佛の実践を誓い、念佛を行うものであった。これを中国における浄土佛教の始まりともされている。『往生要集』の中では「臨終行儀」として記された念佛の実践方法を基にして、葬送儀礼を追加したものが源信の打ち立てた念佛結社であり、それを「二十五三昧会」と言う。この「二十五三昧会」を元に各念佛結社が作られていったのである。それはつまり念佛の実践が広がり、根付いていったことと言える。

この「二十五三昧会」とは、源信とその法友慶滋保胤ら二十五名の僧侶が横川首楞厳院にて毎月十五日羊の時刻、午後二時ごろ集まり、法華経の講義の後に回向と起請文が読まれ、その後は翌朝の辰の時刻つまり午前八時までひたすら念佛三昧を目指すというものであった。そして結社の構成員・結衆は互いに扶助し規律を守り、病を得た者がいれば往生院という阿弥陀佛像が安置された堂に移し、病人の看護をし、西方に向けられた阿弥陀佛像の後ろに病人を置き、阿弥陀佛と病人を五色の旛（五つの色の布）で結び、西方極楽浄土へ往生する想いをこらさせる。往生を遂げた者は同じ墓所へ埋葬し、念佛会を行ったという。】

以下次号に続く

（征阿）

観経物語（１１０）

正宗分（しょうじゅうぶん）その64

散善（さんぜん）上品中生その１

《本文その１》

上品中生とは、必ずしも方等経典を受持し読誦せざれども、善く義趣を解し、第一義諦に於いて、心驚動せず、深く因果を信じ、大乗を謗らず。此の功徳を以て、廻向して極楽国に生まれんことを願い求む。

此の行を行ずる者の、命の終わらんと欲する時、阿弥陀佛は、観世音・大勢至、無量の大衆と与にし、眷属囲繞し、紫金の台を持して、行者の前に至り、讃して言う、法子よ、汝は大乗を行じ、第一義を解す。是の故に、我れ今来たりて、汝を迎接すと。千の化佛と与に、一時に手を授く。行者は自ら見るに、紫金の台に坐せり。

《意味・訳文》

上品の中で、中生（の往生をする者）とは、必ずしも方等経典（＝四方に平等にあまねく真理を説く経典、すなわち大乗の経典）を如何なる時でも心に受けとめて捧持してはいないし、読み返してもいないが、第一義諦すなわち最高の真理に対して、心が深意の理解に苦しんだり驚いたり乱れたりすることなく、ただ深く因果の道理を信じて、大乗の教えを謗ることもしない者である。これらの行為によって得た功徳を振り向けて、極楽国に生まれることを願い求めるのである。このような修行をする者が、その命を終えようとする時、阿弥陀佛は、観世音菩薩や勢至菩薩、そして無数の衆僧たち（修行する僧ら）と共に、それら従者たちに取り囲まれながら、紫金色の台座を携えて、往生をする者の前に進み、褒めたたえて言われる。『法の弟子よ、汝は大乗の教えを実践し、最高の真理の何たるかを理解している。だから私は今、ここに来て、汝を迎えいれて、見えるのである』そう言って衆生を救い導くために現れた千人の佛とともに、一斉に手を差し伸べられた。上品中生の修行者は、ふと、我が身を振り返ってみると、いつの間にか自身が紫金の台座の上に坐っているのであった。

《私訳》

この中品中生の善人は、文面では世福（倫理道徳などの世間的な善）・戒福（宗教的な善＝戒律）・行福（宗教的な心構えと行い）のどれに当てはまる人なのかわかりにくいけれど「深く因果の道理を信じて」という言葉がカギで、それを善いことをすれば善い結果が得られるという世間の道理ととして受け止めようと、または宗教的真理として受け止めようと、この因果を信じて行動する人は行為の全てが三福の善行に当てはまり、ただ上品上生と比べて恒常的かどうかの差にあると言っているのです。

《妙星斎》